

庭のあちこちに、植えた覚えのない白い高砂ユリが咲き競い、いずれも頭を深く垂れている。しおらしく、いい眺めではあるが。「あれ、夏より早く去れ」と陳情しているのじゃないか」といふ声も出た。今年ほど嫌われた夏は、かつてなかったのではないかと、とつくづく思う。

ところで、私の入院騒動もあつて手にするのが遅れてしまったが、毎年心待ちにしている戦争記録集『孫たちへの証言』第26集をすっかり読むことができた。この一冊を目にしないと、夏が過ぎていかないうちが来ている。それほどに響くものが大きく、根深い。

当コラムでは第23集以降、毎夏紹介してきたが、大阪の小さな出版社・新風書房の社長、福山琢磨さんの手作りで、第1集が編まれたのは昭和の終わり、一九八八(昭和六十三)年夏のこと、竹下政権下、リクルート事件で大騒ぎの最中である。戦争記録どころでなかった。当時、福山さんは五十三歳、以来、平成に入つてずっと記録集め

岩見隆夫の サンデー 時評

第773回



百五十九編に激減し、福山さんはショックを受けた。しかし、今年の〈あとがき〉で書いている。〈いつまでも戦争にこだわりのついている私に、アドバイスをくださった方もあった。そんな声は聞き流し、あくまでもかたくなに自分を信じて訴えた。〉

正解だった。応募は実に八百七十三編(昨年の三・三倍)と躍進した。「いままで誰にも話したことがありません」と手紙を添えられた方が多かったのは驚いた。娘や孫が代筆されたのも目立つた。こうした家族の語り継ぎは大切なことであり、できるだけ採用した。とにかく全編に「戦争」が渦巻いている……

八百七十三編の筆者の年齢だが、もつとも多いのが八十年代で四百四十人、ついで七十年代二百八十八人。驚いたのは九十年代が九十八人も(戦争)を綴っていることだ。百代の女性も一人いた。平均年齢が八十四・四歳だった。

このうち一割弱の七十四編が第26集に採用、収録された。全編読

90代が98人も「戦争」

を綴った

きて、さあこれからというとき、有無を言わず夫ももぎ取られ、途方にくれる。しかし、共同作業だから勝手は許されない。冬は水が服に付けばすぐ凍ってしまうほど寒い。流した涙も凍った。

春がきて緑が大地をおおうとほつとした。八月には娘が生まれた。(昭和十六年)十二月八日、戦争が始まると開拓団にも召集が次々にきて、あつという間に老人や子連れの女ばかりの生活になった。それでも勝つことを信じ歯をくいしばって働いた。

昭和二十年八月、ソ連が満州国境を突破してきた時、すでに日本の軍隊はいなかった。しかし、我々開拓団は国境警備と戦時下の食糧増産のためと言われ、黒龍江省の

一帯へ移民させられていたのである。このため多くの開拓民が死亡したり孤児になったり、棄てられた。終戦の知らせは少し後で知ったが、本気にしなかった。しかし、治安が悪くなり殺される人も増え、満州の人が敵国人となり匪賊となつたことで敗戦を確信した。

子供をおぶり大草原の窪地に身を隠す人、老人は殺されてもよいと家に残った人もいた。布団や衣類、食料などは全て持ち去られ、反抗すれば即銃殺された。物がなければ火の付いた薪で男の人を叩き、女を出せと乱暴した。私たちは無抵抗で身をひそめ、帰って行くのをじっと待つだけであった。

十月初め意を決し二十キロ離れた東陽開拓団(熊本)に避難したが、

ここも襲撃され多くの犠牲者を出す。さらに三ヶ先の新発開拓団(山口)に合流、やつとハルビンへ、引き揚げの貨物列車に乗った。

待望の引き揚げ船に乗船できた感激は一生忘れられない。……(投稿者 孫・大矢かおり)――

夏『孫たちへの証言』を読むたびに痛感することが一つある。福山さんが二十六六年間に集めた手記の総数は一万七千二百九十一編、そのうち本に掲載したのは二千六百四十四編だ。残りの一万五千二百二十七編(八八%)は新風書房の倉庫に眠っているのだらう。

それらを全部活字化して、一般の閲覧に供することはできないか。どの一編にも、文章はへたでも(戦争の真実)が語られているはずだ。

ませてもらった。九十年代が十五人も登場している。毎年どの一編をご紹介するか迷うのだが、九十年代のうち、「大陸の花嫁」と言われて渡満したが――愛知県北設楽郡・古田きみゑ・九十三歳・その後死去)を。

政府が手記の収集を！ 未来に語り継ぐために

――私は二十一歳の昭和十五年九月、主人の家で形だけの結婚式をし、設楽町から(大陸の花嫁)として村人の見送りを受け、満州への一歩を踏み出した。まるで出征兵士のようなであった。

下関から釜山行きの船に乗り、釜山からハルビン、チチハルと汽車にゆられ、黒龍江省甘南県ハラ(大平山村三合屯開拓団)にたどり着く。十月半ばというのに震えるほど寒く、大平原の中に開拓団の部落だけが遠く点在して見えるだけ。(大陸の花嫁)という華やかな言葉とはほど遠く、失望した。草ぶき屋根と泥壁の粗末な家を作り、三家族が入った。そして、共同炊事、共同農作業を始める。その年の十二月、主人に召集令状が来て出征した。こんな僻地まで

いまからでも遅くない。政府が(戦争記録センター)を作り、全国に散らばっている手記をかき集めることは、そんなむずかしいことではない。戦没者の遺骨収集に劣らない価値あることと思う。

私も五月に、『敗戦――満州追想』(原書房)を出版した。敗戦から引き揚げまで一年半の満州(大連)体験と戦争の恐ろしさを綴ったものだ。本の宣伝をしているのではない。これから国を担う人、特に小中高生に(戦争)とは何かを少しでも知ってもらいたい一念からだ。私たち戦争世代は晩年を迎え、みなさんそんな思いに駆られている。

今週のひと言
スィカがうまい、こんなにうまかったかな。

日本財団と

エシカルな 商品づくりの 輪を広げる

企業、募集。

ファッション業界を中心に、
「エシカル」=社会に配慮した
モノづくりが広がっています。
私たちは、紡績・アパレル・
商社などさまざまな企業を
結び、その輪を拡大します。
御社もエシカルな商品づくりを。

さあ、いっしょに次の挑戦へ。

詳しくは

日本財団CSR

検索

日本財団
THE NIPPON
FOUNDATION